道普請人ルワンダでの活動を終えて

関西学院大学 人間福祉学部 社会起業学科 3 年 笠原 幹生

1. はじめに

この度は急なお願いにも関わらず、道普請人ルワンダ事務所での活動に参加させていただき誠にありがとうございました。木村教授をはじめ、現地でお世話になりました千葉さん、ルワンダ事務所の皆様、道直し訓練でご一緒した村民の皆様に心より感謝申し上げます。

10 日間の滞在で道直し訓練を実施する意義を知るとともに大学での座学の講義だけでなく実際にフィールドに出て学ぶ必要性を再確認することができました。今回はその活動で得られた学びをこの報告書にまとめたいと思います。

2. 経緯

私は大学で多種多様な国際協力(JICA,NPO,NGO,社会起業など)とその運営方法について研究しております。現地で行われている国際協力について、実際に現場を拝見し、現場に訪問して現地の方々と話をすることでしか学べないことを学びたいと考えていました。そこで道普請人様のホームページで道直し訓練の方法や仕組みなどを拝見し、活動の見学を依頼させていただきました。

3. ルワンダでの活動について

今回、私はルワンダ北部のムサンゼ郡で実際に道路工事に参加させていただきました。

ムサンゼ郡



アフリカ大陸内でのルワンダの位置

東はタンザニア、西はコンゴ民主共和国、南はブルンジ、北はウガンダと国境を接する東 アフリカの内陸国



ルワンダ国内で青い枠で囲っているのがムサンゼ郡

北はコンゴ民主共和国に国境を接し、火山が多く、野生のマウンテンゴリラを見にたくさんの人が訪れる地区。

ムサンゼ郡の工事現場は山から下りてきて幹線道路と接続するような、近隣の地方都市への出勤、生活必需品の買い物、農産物をマーケットに売りに行く際に村民みんなが使う道でした。そんな村民にとって生活に欠かせない道でしたが、山につながる道であったため、雨が降ると道路が川のようになってしまい、雨が降っていなくても大量の水によってえぐられ凹凸の激しいものになっていました。その道を直すために、まず道を平らに整地し、土のうに土を詰め並べて圧縮する作業を体験しました。完成した道は大型のダンプが通ってもえぐれない頑丈なものでした。





施工前 施工後



真剣な表情で土のう工法について学ぶ参加者

初日の土のう工法について解説する 4 時間の座学では参加者の積極性、真剣な眼差しに驚かされました。



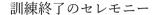


参加者と談笑しながら作業

道直し訓練の終わりに近づくにつれ、参加者の皆さんの道直しの腕も上達し、効率的に 作業することができました。

最後の方は雨季が近づいていたこともあり苦戦しましたが無事に 10 日間のトレーニング を終え、セレモニーを行うことができました。







土のう工法によって道直しされたことを 示す看板

4. 感想

私は最初、トレーニングの参加者にとって見慣れない外国人でよくわからない人だと思われていたようで参加者の方々とあまり話せませんでした。しかし、一緒に汗を流し、道路を直す中でキニャルワンダ語を教えてもらったり、反対に日本語を教えたりして、次第に心の距離が近くなったように思います。参加された皆さんと話す中で「もっとお金がいる」、「私はスマホを持っていないから働いてスマホを買いたい」など、見た目だけだと何不自由なく生活できているように見えるのですが、参加者の皆さんは人によって多少の違いはあるものの、満足のいく暮らしは出来ていないのかもしれないと思いました。そして道普請人の「参加者は日当をもらい、道直しのテクニックを学べて、村民は生活道路が修理されることで容易に市場に農産物を売りに行ったり、買い物に行ける」という仕組みが地域にもたらす良い影響を感じ取ることができました。

また、私は道直し訓練は日本人のエンジニアが中心となって現地のルワンダ人に土のう工法を教えているものだと勝手に思っていたのですが、実際はそうではなくて道普請人ルワンダのエンジニアをはじめとしたスタッフが強い意志・信念によって主体的に活動に取り組むことを知り感動しました。このことを通じて国際協力は上から目線であったり、支援してあげているという考えでは根本的な問題の解決にならないのではないかと考えさせられました。

私はルワンダに来る前、国際協力の話をするときに決まって出てくる「支援」や「自立」という言葉に何か引っかかるような違和感を感じていました。「やってもらうという状況が普通になり支援に依存してしまうと支援から抜け出せなくなり、自立につながらない。支援は本当に意味があり、必要なのか。」という議論がしばしば国際協力の専門家の中で起こっていると大学の講義で聞きました。「支援」や「自立」という言葉、「支援は必要か」とい

う議論にずっとモヤモヤしていました。私はこの問いの答えについて自分自身の考えを出せていませんでした。ルワンダに訪問して現地の方と話し、1 人の人間として接したとき、「支援」や「自立」という言葉は上から目線だと感じましたし、両親の稼いだお金のおかげで大学に行けてルワンダに来られている私に比べて、私と同年代、下手をすれば 15 歳ぐらいで自分でお金を稼ぎ、家族の生活費に充てたり、弟や妹の学費に充てたりしている人の方がよっぽど「自立」していると考えました。確かにお金を出して道直し訓練をしているので支援ではあると思いますが「支援」という言葉に囚われすぎて上からの活動になれば、意味をなさないのではないかと感じました。しかし、そのような見方にならないように実践するのはとても難しいと思います。私がもし日本人の現地駐在員だとして、本当にそのような見方をしていないと思っていても、潜在的に心に存在する偏見があるとできないからです。その偏見に気づくためには常に自問自答をすることが必要なのではないかと思いました。道普請人ルワンダのスタッフの主体性、千葉さんをはじめとする道普請人様の考えによって道普請人様の活動がより意味のあるものになっていると実感しました。ルワンダを今回訪問し、様々な方とお話してこのような国際協力の分野で私がモヤモヤしていたことに対して自分なりに現時点での答えを見つけられたように思います。

5. 最後に

今回、土木に関する専門知識を持たずに参加させていただきましたが、私の拙い英語での質問にも道普請人ルワンダの皆様には快く回答いただきました。おかげさまで、土木の知識に加え、普通の日本での生活ではわからないようなアフリカの地方の生活や課題、実際の国際協力の現場について学ぶことができました。日本の大学で教科書や講義から得られるものだけでなく、このような実際に現場に行って五感を最大限に活用し、学ぶことの大切さを再確認することができました。

しかしながら、上手くいったことばかりではなく、私の英語力が低いことで会話の中の細かい部分について拾いきれなくて理解しきれない点があったり、話したいことや聞きたいことを上手く言語化できずにもどかしい思いをしました。国際協力をするうえで英語を学ぶことは重要だと感じ、英語をもっと学ぼうと思いました。

将来、今回の良い経験ももどかしかった経験も活かせるようになりたいと思います。ルワンダでの生活は私の人生において忘れられない経験となりました。また、ルワンダに戻りたいと思います。最後になりますが、受け入れていただいた現地駐在員の千葉さんをはじめとする道普請人の皆様、本当にお世話になりました。心から感謝申し上げます。



道普請人ルワンダの皆様と筆者(左から2人目)と 今回は日本からもう一人高校生ボランティアが参加していました(左から4人目)